

『今様十二月繪抄』 - 翻刻と解題 -

前田桂子

“Imayou Juunigatsu Eshou”・Republication and Commentary

Keiko MAEDA

本書は稿者が所蔵する近世の繪草子(小本一冊、十丁)で外題に『今様十二月繪抄』とあるが、『国書総目録』に同名の記載はない。表紙より、絵は歌川芳虎、出版社は甘泉堂と分かる。一方で、裏表紙には「書肆 江戸よし町」(虫損)橋角 山本平吉梓」と書かれ、同ページの上部に「栄久堂刊行蔵板書目」として、「永花百人一首文十抄」「源氏五十四帖」など四種の書物の広告がある。表紙と裏表紙見返しの版元が異なり矛盾しているが、紙面の状態から、裏表紙は別本ものを補修してとじ合わせたらしく、虫損による痛みが本文と合わない。実はこのページと全く同じ版で刷られたと思われる『みめより草紙』(後編)という笠亭仙果著、版元山本平吉で弘化四年(1847)に出版されたものがある。本書の破損部分はこれによりほぼ明らかとなり、版元の所在地も「江戸よし町おやぢ橋角」ということが判明した。

ところで挿絵は、本文末尾より一勇齋国芳画と分かる。これも表紙の記述と矛盾するようであるが、国芳と芳虎は師弟関係にあるのに特に珍しいことではないようである。さらに、本文二丁裏に描かれた幟にある「いつみや」という文字、三丁表の「泉市」はともに國芳、芳虎ともに交流のあった版元の異名である。表紙に明記されていた「甘泉堂」は別名「和泉屋市兵衛」、「泉市」と名乗っていたことから、表紙と本文の間に齟齬はない。以上の事と本文の内容から本書の題名は『今様十二月繪抄』で間違いないと考えた。元々あったはずの著者などの情報を記した刊記および裏表紙は紛失していることが明らかではないが、絵師が一勇齋國芳(1797-1861)であること、表紙の絵がその弟子の芳虎(国会図書館の古籍データベースでは1850-1881年の出版物が確認できる)であることを考えると、成立年代は1850年から1860年あたりであると推定できる。

内容は、「銀座の国次の凧」(正月)、「大江戸」(二月)、「舟月の雛人形」(三月)などの江戸名物や、釈迦の誕生日を祝う風習(四月)、端午の節句の柏餅や菖蒲打ちの風習(五月)など、各月の年中行事の紹介である。挿絵はすべて子どもが描かれ、江戸のガイドブック的な意味合いを持ったと思われる。また、現代においては当時の文化的資料となる。この書には各ページの匡郭の上に、「三州吉良横須賀 大嶋屋」という壺型の印章が十か所認められた。「三州吉良横須賀」とは、現在の愛知県西尾市吉良町横須賀に当たり、大嶋屋は貸本屋ではないだろうか。三州(三河の国)の隣の尾張では大野屋惣八が日本一大きな貸本屋「大惣」を営むなど、かの地にあつて貸本屋が多数営業していたことが、長友千代治^{注3)}からわかる。本書は未翻刻である。

【凡例】

翻刻にあたって、次の方針をとった。

- * 漢字は常用漢字を用い、仮名は現行の文字に改めた。
- * 原本にある振り仮名はそのまま記し、読みの便宜のために私に施した振り仮名は()に入れて区別した。
- * 翻刻は本文のみとし、画中心は一部省略した。改行は原本に従ったが、散らし書きの部分はまとめたところがある。
- * 翻刻の文章は原本が合印などで指し示す順に配置し、適宜丁数を()に括って示した。
- * 翻刻の下方に、語釈を示し、対象となった語には本文に傍線を施した。

【翻刻】

一年の計は元日にありとは
兼てしれど一寸延れば
廣やかな大晦日の
あしたとなればまた
気のゆるむ人心奴風
の足と俣にぶらり
〳と日を送るうち
いつしか光陰矢の催
足節季候の跡より
掛取さつさとこざるゆえX

X やりはこの遣かねて
節分鬼より
其身内に
居りかねる
これ常の心
がけに
あれば

【語釈】

節季候…せきぞろとも。
年末の借金取り。
やりは「」…一つの羽子を
二人以上で突きあつこ
と。二人以上では
ねつき。おいばね。や
りばね。

あさゆが
朝夕
おこたり
なく
勤つとめ
給へ
かし(一オ)

正月は
ひとしせの
はじめにして
いちやうらい(一種来種)
ふくするなれば(種ひ)
しゆく(種ひ)のことはじ
めあるなりこともは(法年) (一ウ)
こそ(法年)のうちより
正月をまちて
さま(法)のあそびなす
たこ(羽想)をあげ
はねをつぎ
手まりをつた
おもしろくうたひて
うつをとるなり(獅子舞)
又し(獅子舞)まひ万才
さるひき(猿曳)

一陽来復：冬が去り春が
来ること。新年が来る
こと。
猿曳：猿に種々の芸を教
えこみ、これを演じさ
せて金銭をもらいつけ
るもの。すでに鎌倉時
代からみられる。猿ま
わし。

とりおひなど(馬追)
きたりあらたまの(春)
はるをことぶく(春)
「あれまた
はねが(羽)
かざりへ(脚)
かゝつた
よ(小僧)
こそう
はやく
とつて
くんな
じれつ
たい
のう
「サア
これで
いゝか
はやく
たぐん
ねへ
此たこ
は
ぎんざの(銀座)
くに(國)
つぐの
所で

(二オ)

鳥追い：門付(かどつけ)
芸の一つ。江戸時代、
新年に女太夫が新服に
日和下駄、編笠姿で、
三味線をひき鳥追歌を
うたつて人家の門に立
ち米銭を乞うたもの。
國次：歌川國次
(1800 - 1861)
江戸時代後期の浮世絵
師。寛政十一年生まれ。
初代歌川豊国にまな
ぶ。江戸銀座に住み、
文化頃風絵で名を馳せ
た。風絵の元祖と言わ
れる。

かつた^(異)

か

どつり

で

いと

思つた

(二才)

二月はきさらぎ^(如月)

ともいふてはじめの

むまの日はしよ^(所々)

いなりまつりを

するなり

なかんづく

大江戸は

八千八丁の

つぢ

うら

いなりの

やしるなき^(社)

所なくその

ほかやしきかた^(屋敷方)

(三才)

又は太郎

のいなり

諸方^(夜宮)にあり

てよみやより

八千八丁…不詳。八百八町に同じか。

太郎稻荷…太郎稻荷神社は、柳川藩立花家の屋敷(浅草下谷)にあつた神社であり、同じく西町太郎稻荷(浅草鳥越)もあつた。

よみや【夜宮・宵宮】…祭礼で本祭の前日の夜に行なわれる小祭。宵まつり。よいみや。よみやまつり。

かぐら所^(神楽)をたて

そのほかかざり

ものあん^(行)

どうを

いだし^(だし)

にきはひ

いはん

かた

なし

故人の句に

初午や

糸どは

ひと木も

森の

かづ

(三才)

三月はやよひのさくら^(弥生)

つきにてもゝのせつくは

ひいなまつりをなす^(雛)

玉さん舟月の人形

美をつくして

こしらへたるを

かさり^(白瀬) しろさけ

はまぐりそのほか

しゆ^(種)のものを

(二ウ)

玉山、舟月…江戸後期の古今雑の三名人のうちの二人。川端玉山と原舟月。あと一人は仲秀英。

そなへまつる
 これおほうち(大内)のまなひ
 をんなの子もちたる(家)いゑは
 なをさらはつ(初)のせつくとて
 くさもちをひし(妻)につくりて
 これをくはる(配)なり
 (四才)

「わたくしは
 五人はやし(妻子)

より

とぶぞ(道真)

おどぶく(道真)

をたん

と

かつて

もら

たい

い

よ

「あ(業)の

なり(業)

ひら(業)

の

にん

ぎやう

は

(三ウ)

大内：大内雛の略称。雛
 人形の一種。天皇・皇
 後の姿をかたどつて作
 った男女一揃いの人
 形。おおうち。内裏雛。

なりひら：在原業平によ
 うな美男子の容姿。

まことに
 きれいで
 ござり
 ます
 へね
 (四才)

四月は
 うづき(卯月)
 とも
 いふて
 うの
 はなを
 もて
 四月
 八日
 (四ウ)

し(新)や(新)
 か(遊)
 た(生)ん(誕)
 し(生)や(誕)う
 とて
 は(花)な(堂)
 み(御)ど(堂)う
 を(花)つ(堂)くり

花御堂：四月八日の灌仏
 会（かんぶつえ）のと
 き、釈迦の誕生の立像
 を安置し、種々の花で
 屋根を葺（ふ）き飾つ
 た小さな堂。花の堂。

やくたう

をたき

ぞくに

あまぢや

といふて

所々の

どうぜんに

これをなす

さんけいくんじゆ

あまぢやをもとめ

めをあらひまた

ふくようす

「おしやかのたんじやう」

「あまぢや」

此つきは

ほと

ぎす

なき

また

はつ

かつ

を

を

(四ウ)

(五オ)

甘茶…アマチャ、またはアマチャツルの葉を乾燥させて作ったあまい茶。四月八日の灌仏会（かんぶつえ）に、釈迦の像に注ぐ風習がある。甘茶水。

初鰹…初夏のころ、いち早く漁獲して最初に市場に出た鰹。特に、江戸では、これを食べることを誇りとする風習があった。

しやう

くはん

なす

五月はあやめのせつく

にてしやうぶ酒しやうぶ

ゆにいりて百ひやうをはらぶ

おとこの子のせつくなるゆへ

のぼりをたてかぶと人形

あやめたちをかざり

かしはもちをくばる

ちまきをいはふなり

子どものうちより

しやうぶうちをなして

あそぶ

「サア これから

わきざしを

もつてきて

いくさこつこを

しやう おれがよしつねだよ(六オ)

「おいらは

きつもん

りやうに

(五オ)

菖蒲太刀：五月五日の端午の節句に子供が太刀代わりに腰にさしたり、採物（とりもの）として手に持ったり、菖蒲打ちに用いたりしたシヨウブ。近世は木製となり、飾りものとしての金銀彩色のそのりの深い木太刀をいう。しやうぶがたな。あやめたち。

義経：源義経

九紋竜：水滸伝の英雄で正式名は史進。上半身に九匹の青竜を象つた見事な刺青があるためこう呼ばれた。

ならア
「きうもん
りやう
より
よし
つね
より
いつち
糸^(五)蔵
が
つよい
ぜ
おいらは
しばら^(五)
く
だ
六月はみなつき^(水無月)
といふみそき^(禊)
のはらひ^(禊)
あり また
きおん糸^(祇園会)
とて^(牛頭)
こす^(天)
てん^(王)
わう^(王)

(五ウ)

(六オ)

前田…『今様十二月繪抄』 一 翻刻と解題 一

海老蔵：歌舞伎役者、市川海老蔵。荒事を得意とした。
暫：江戸歌舞伎の市川家の当たり狂言十八種である「歌舞伎十八番」の一つ。他に、鳴神、不動、勸進帳、助六、外郎売、矢の根、毛抜などがある。
祇園会：神田明神の地主神である祇園三社（天王社三社）の祭祀。
牛頭天皇：素戔嗚尊の化身とされ、祇園社の祭神として祇園天神ともいう。

の
みこしを
いだし
これを
かつぎて
あつきを
のぞく
なかにも
糸とは所^(江戸)に
てんわうのまつり
あり十五日は^(日吉山王)
ひよしさんわう^(祭礼)
のさいれいにて
まち^(餅)
ほこを出し
なりもの^(鳴物)
ひきもの^(踊り)
おどり^(原台)
やたひ
いだす
けんぶつ
くんじゆ
おびたし
「よい」
「よい」
「よい」
「よい」

(六ウ)

(七オ)

(六ウ)

日吉山王：日吉山王神社。永田の馬場（現千代田区永田町）にある神社。徳川氏の産土神。祭礼は六月十五日、天下祭のひとつ。

「おみきしよだ

さげろ (七才)

七月はふみづきといふ
 六日の夜はたなばた
 まつりにてけんぎう
 しよくじよをまつり
 さくの糸たにたんさく
 をむすびさゝげまた
 おだまきにはりを
 そへてあぐるすどり
 をあらひきよめ
 うたをかく
 八月 はつき
 ともいふ
 此つきの
 十五夜は
 ひとゝせの
 名月にて
 月のさゆるを
 しやうくはんなし
 うたじやつるりを
 もよほし こゝろ

苧環：糸によつた麻を、
 中を空虚にし、丸く巻
 きつけたもの。おだま

浄瑠璃：三味線を伴奏樂
 器とする語り物の総
 称。

やすき人 (酒) を
 あつめしゆ
 桑んを
 なす

(八才)

九月はきく
 つきとも
 きくのせつく
 ともいふ
 きくは四き
 にあれども
 九月をしゆん
 とすきく酒
 きくなますを
 いはふ そのほか
 しよ (にさい
 れいあり
 桑どはかんた
 みやつじんの
 まつり 美を
 つくせり
 十月はかみなつきといふ
 廿日の日はあきんどのいへ (にて

(八ウ)

神田明神の祭：丑卯巳未
 酉亥年の隔年で施行さ
 れる神田明神の祭礼。
 六月の山王祭礼とともに
 に天下祭と総称する。
 『江戸名所図会』には、
 「神田明神祭礼 隔年
 九月十五日に執り行
 ふ。氏子の町々より練
 物・車樂等を出だす。
 中にも、大江山凱陣・
 牛若丸奥州下り・朝鮮
 人來朝の学びなどは、
 ことに遠近に聞こえて
 その名高く、もつとも
 美觀たり。」とある。

あきなひがみとてゑびすかうをいはふ(商神)
 神にそなへたるしなをいち(伊)
 かうきんの(講金)
 直をいふてうりかひのまなびをなす(売買)
 「千両」
 「一万両」
 十一月はしも(霜)
 つきといふ(月)
 子ども(子)
 いはひつき(髪置)
 にてかみをき(剃)
 はかまぎを(袴着)
 いはふ此つき(月)
 さんしばあ(三芝居)
 かほみせにて(顔見世)
 やくしやいれかはり(役者)
 のもんかんばんを(紋番板)
 いだしかざり(軒)
 ものをちやや(物)
 のき(軒)につくり
 にぎはひおび(簾)
 たゝしまた(動進相撲)
 かんじんすまふ(勘進相撲)

恵比寿講：十月二十に商
 売繁盛を祈願して恵比
 須を祭る行事。
 髪置：幼児が頭髪を初め
 てのばす時にする儀
 式。
 袴着：幼児から少年少女
 に成長することを祝つ
 て、初めて袴をつける
 儀式。
 三芝居：歌舞伎の中村
 座、市村座、森田座の
 こと。
 紋看板：歌舞伎の顔見世
 前に、役者の名を定紋
 や役柄の下に書いて、
 劇場の木戸前に出した
 看板。
 茶屋：劇場に付属して観
 客の案内や幕間の休
 憩・食事の世話をする
 所。

のかつきやう(興行)
 ありてよ(伊)
 うちより(見物群衆)
 けんぶつくんじゆ(見物群衆)
 なす
 「みやうにちは(明日)
 はやうござり
 ますぞ
 いをのまつ
 には(話)
 を(話)
 どし
 じゃ
 ぞや
 「あれさそんなに
 ゆすぶると
 たいこが(棟)
 こはれる
 から
 そろかに
 やん
 ねへ
 「おらアかつぎては
 もういやだ
 たゞきてに

(九ウ)

緋緘：鎧の威の一種。緋
 に染めた革や組糸を用
 いた威。また、その鎧
 くないおどし。
 そろかに：そろそろと静
 かに。

なるから

かはつて

くんねへ

(十才)

十二月は(月)ごく(極)

げつとて

ひと(一年)とせの

くれにて

せはしく(世)

はるの事

をみな

としの(年)

うちに(内)

したく

なす

せきぞろ(節季候)

きたり(来)

まつかざり(松飾)を

なす所へ(歳暮)せいぼう(祀)

くばりくるやら

もちをつくやら

せはしき事

おびた(影)し

せきぞろ：(前出)
 粟：もちあわを蒸してつ
 いた餅。近世江戸郊外
 目黒不動堂で売ったも
 のが名物であった。も
 とは本物の粟の餅であ
 ったが、享保(一七一
 六～三六)頃より、普
 通の餅を粟の色に染め
 たものとなった。

「此(一日)ひとつすを

あげたら

あとは

あはに

しやせう

「からみもちを

とつて

くれろ

とよ

めでたし

一勇亭國芳画

(十ウ)

からみもち…つきたての
 柔らかい餅を、しょうゆ
 をかけた大根おろしにま
 ぶしたものだ。おろし餅。

栄久堂刊行蔵板畧目

(永花百人一首文十抄、源氏五十四帖などの広告有)

書肆 江戸よし町〓〓 (虫損) 橋角

山本平吉梓

注

1 群馬大学総合情報メディアセンター・新田文庫所蔵。

2 『原色浮世絵大百科事典』第三巻（大修館書店 一九八二年）
によると以下の通りである。

和泉屋市兵衛 いすみやいちべえ

甘泉堂 泉市 江戸 芝明神前三島町太助店・惣八店

貞享^{一六八四}_{一六八八} 明治前期 山中氏 絵本・草双紙・錦絵な

ど多くの作品を刊行した地本問屋の代表的版元

また、國芳は和泉屋市兵衛の版元から安政二年に「善悪道中出世寿古六」という双六を出している。

3 長友千代治『近世貸本屋の研究』（東京堂出版 一九八二年）

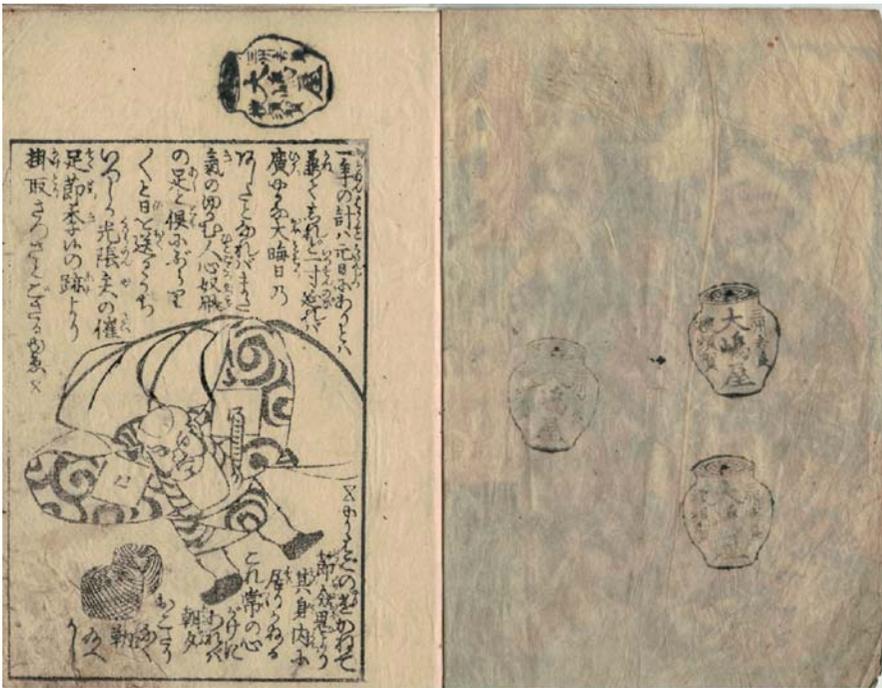
巻末の貸本屋蔵書印リストより、「三州」という地名が記された貸本屋がいくつも確認できる。一部を挙げると「三州高濱豆腐屋」、「三州吉田 九文字屋」、「三州養父 佐源」、「三州横須賀 鹿嶋屋重兵衛」などである。

表紙、裏表紙

長崎大学教育学部紀要 人文科学 第八十二号 (二〇一六)



右：見返し、左：一丁才

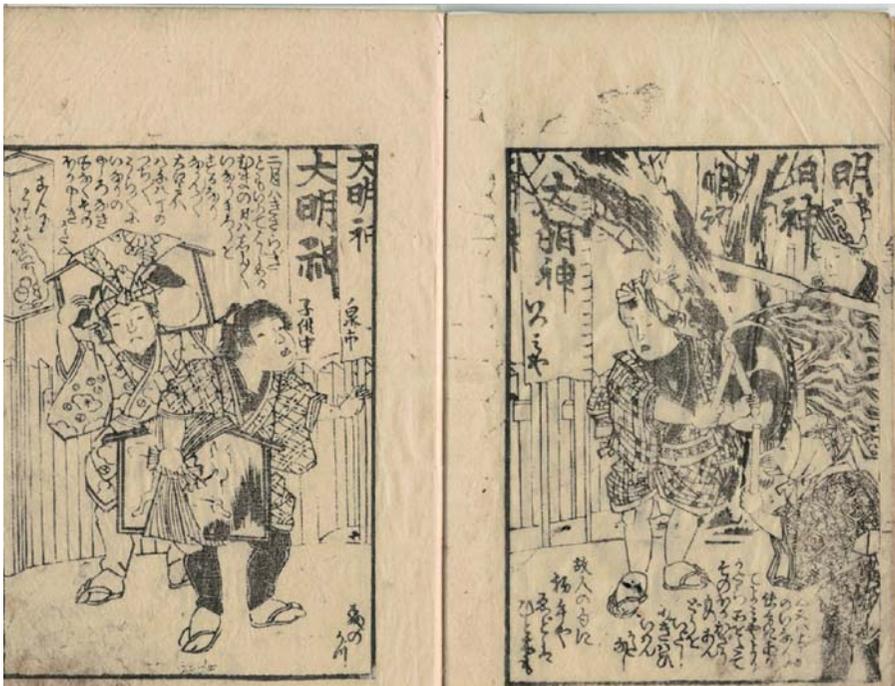


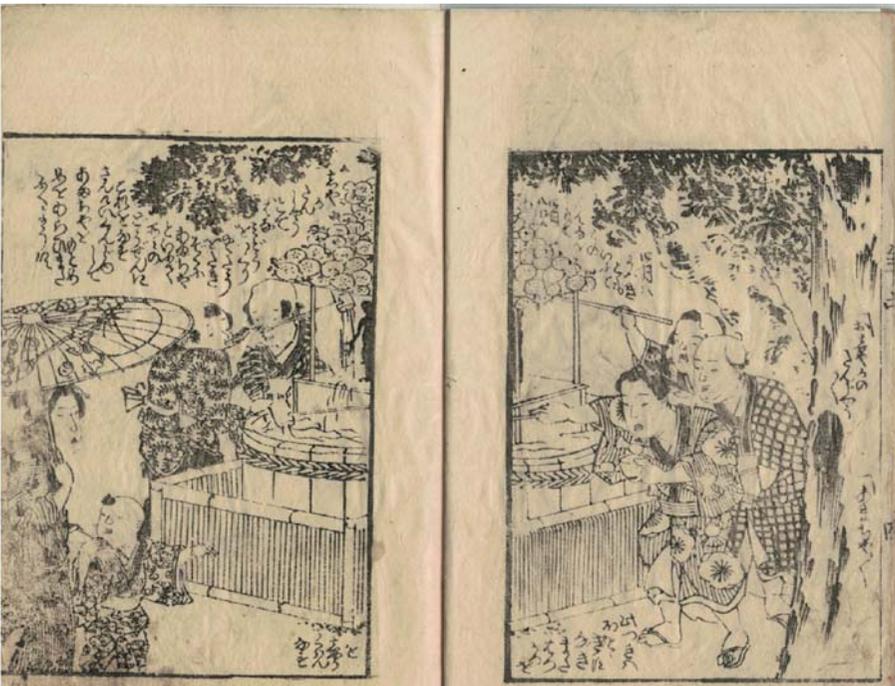
二十八

二丁ウ、二丁オ



二丁ウ、三丁オ





五丁ウ、六丁オ



六丁ウ、七丁オ



七丁ウ、八丁オ

長崎大学教育学部紀要 人文科学 第八十二号 (二〇一六)



八丁ウ、九丁オ



九丁ウ、十丁オ



前田『今様十二月繪抄』

―翻刻と解題―

十丁ウ、裏表紙見返し



三十三